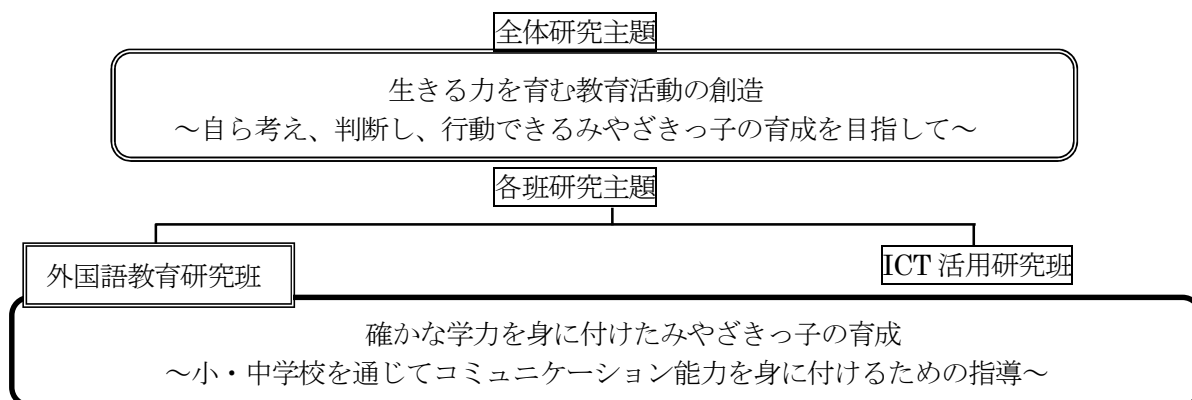


I 研究主題



II 主題設定の理由

文部科学省（以下、「文科省」とする）が平成 29 年 3 月に新学習指導要領を告示し、小学校では令和 2 年 4 月、中学校では令和 3 年 4 月から全面実施される。これまでの外国語教育の成果として、平成 23 年度から小学校高学年に外国語活動が導入されたことで、児童の高い学習意欲、中学生の外国語教育に対する積極性の向上などの成果が示されている。一方で、音声中心で学んだことが、中学校段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていないことや、日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題があることが指摘されている。また、小学校から各学校段階における指導改善による成果が認められるものの、学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況や、学校種間の接続が十分とは言えず、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができないといった状況も見られているとしている。これらの成果と課題を踏まえ、新学習指導要領では小学校中学年から外国語活動を導入し、「聞くこと」「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることを重視することとしている。

昨年度の研究では、宮崎市内の外国語教育の現状を把握するために、小中学校教員に対して実態調査を行った。それによると、多くの小学校教員から外国語に関する授業での具体的な指導方法の提示が求められていた。そこで、「聞くこと」の指導方法を明らかにしながら英語に苦手意識をもつ教員に授業づくりにおける 1 つのパターンとして提示することを試みた。また、小学校の学習を中学校につなげるための授業改善の工夫の一端を明らかにした。一方で、小学校における「聞くこと」のより一層の充実や中学校での明確な場面設定による言語活動の実施が課題となった。

本年度の研究においては、前述の課題である言語活動について、小中連携した取組を行うこととした。これは、小学校と中学校の指導の連続性や言語活動の充実を目指すことが、今後の本市の教育活動に対して有益であると捉えるからである。言語活動では、小学校の Small Talk の充実が課題である。このことを踏まえ、本研究では「話すこと」の言語活動について、小学校と中学校の双方のアプローチによる検討を行う。「話すこと」の言語活動を充実すれば、児童生徒のコミュニケーション能力の育成に大きく寄与する。このことで、「自ら考え、判断し、行動できるみやざきっ子の育成」に迫ることができると考える。

III 研究の目的

新学習指導要領全面実施に向けた小中学校の外国語科における言語活動、及び小中を円滑につなぐための方策を充実させるための手立てを明らかにする。

IV 研究方法

1 小学校における研究

『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』（文科省、平成 29 年、以下「ガイドブック」とする）では、「Small Talk」が高学年の言語活動として位置付けられている。主な目的は、既習表現を繰り返し使用する機会を保障し、その定着を図ること、対話の続け方を指導することである。2 時間に 1 回程度で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝えあったりする帯活動として設定されている。5 年は指導者の話を聞くことを中心に、6 年は児童同士で伝え合うことを中心にやりとりが行われる（図 1）。しかし、例示されている Small Talk は、英語の指導に慣れていない小学校教員が授業で取り組むには、ハードルが高いと言える。さらに、単元指導における Small Talk の位置づけが把握しづらく、言語材料との関係が捉えづらい。そのため、Small Talk の目的の一つである対話の継続は、指導上の課題である。

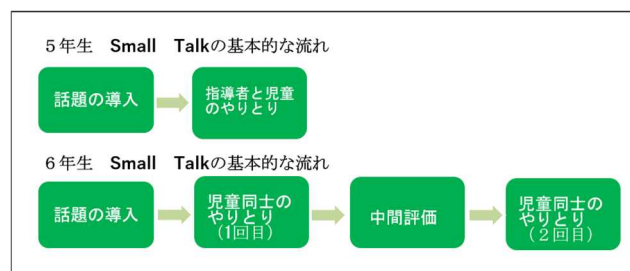


図 1：Small Talk の流れ

そこで、次のように Small Talk のポイントを整理して実践しながら確認することでより良い指導の在り方を究明し、今後の外国語教育の充実に貢献できると考えた。

(1) Small Talk の調査と指導のポイントの整理

(2) 研究授業による検証

2 中学校グループにおける研究

新学習指導要領では、技能が「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと〔やりとり〕」、「話すこと〔発表〕」、「書くこと」の 5 領域に整理された。このうち、「話すこと〔やり取り〕」、「話すこと〔発表〕」では、領域別の目標が次のように設定されている。

話すこと〔やり取り〕

ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。

話すこと〔発表〕

ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。

以上から、指導においては「即興」で話すことによる言語活動¹が必要となる。このことを踏まえ、次のように「話すこと」の言語活動を検討する。

(1) 「話すこと」の指導に関する整理

(2) 指導方法の検討

(3) 研究授業による検証

V 研究の実際

1 小学校グループの実践

(1) Small Talk の調査と指導ポイントの整理

前述のとおり、小学校の教員にはハードルが高い Small Talk の指導の充実に向けて、外国語に係る教員への調査や先行実践から、指導のポイントを整理する。

① 宮崎市内の外国語に関する教員を対象とした調査による分析

効果的な Small Talk の指導方法について、宮崎市内の英語教育推進リーダー及び外国語教育専科教員を対象に調査を行った。調査は、記述式による質問紙で行い、夏季休業中に実施した。回答数は 7 である。結果から、Small Talk の指導では、単元のゴールを意識して指導内容に関連したテーマを取り上げること、また、児童にとって身近な話題からやりとりの導入をすると活動が充実することがわかった。これらの工夫により、児童にやり取りを続けるための基本的な表現を定着させ、自分自身

の言葉で応答ができるようになることや、目的・場面・状況に応じて4往復程度のやり取りを続けることができる児童が増えることが見込める。

② Small Talk の授業分析

指導のポイントを確認するために、教育情報研修センターが撮影した授業の映像を視聴して、授業分析を行った。映像の視聴にあたっては、事前にガイドブックで **Small Talk** の指導の詳細を確認し、相手の話した内容の中心となる語や文を繰り返して確かめることの重要性を理解した。映像を視聴しながら、この「繰り返し」の場面が **Small Talk** の中でどのくらいの頻度で出てくるのかに着目した。**Small Talk** の先行実践では、児童の発言に対して重要語句を繰り返し活用し理解を示したり、会話を広げたりする姿が多く見られた。

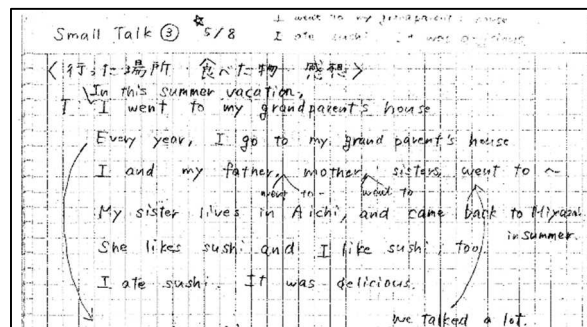
③ 研究員同士の模擬授業

Small Talk を行う上で、研究員の指導においても表1に示すような課題があった。

表1：研究員が抱える **Small Talk** を行う上での課題

研究員	担当	課題
A	5年	<ul style="list-style-type: none"> ● Small Talk の内容が精選されておらず、単元を通してのつながりがない。児童の反応に対して、内容を深めることや適切な返しができておらず、児童がやり取りをしたいという意欲を高めることができていない。
B	6年	<ul style="list-style-type: none"> ● 教員が Small Talk のテーマに沿って児童に話の型を与えてしまい、やり取りに広がりが見られないことや、場面・状況設定に課題があり、児童自らコミュニケーションを図ろうとする意欲を高めることができていない。

この課題の解決を目指して、研究員同士による研修時間を設定した7回と、夏季休業中の5回、計12回模擬授業を行った。その際には、個人で作成した **Small Talk** ノートを持ち寄り、やり取りの流れを記録したり、互いの意見を出し合ったりした(資料1)。また、英語の表現などの誤りについてはその場で指摘し合い、修正を行った。模擬授業を行いながら、その時々児童の反応を予測し、児童に表現させる語句を精査した。また、児童が表現したいと思えるような発問の工夫や、学習の流れを共有し、各自がもつ課題解決を図った。夏季休業中には、個別で指導主事の助言を得ながら、更なるスキルアップにつなげた。演習を繰り返す中で、それぞれの課題に対しての改善策を得ることができた。



資料1： **Small Talk** ノートの一部

④ 指導のポイントの整理

以上の調査や模擬授業などから、以下の5つを **Small Talk** の指導ポイントとして整理した。

- ・ 指導内容に関連したテーマとする。
- ・ 児童に身近な内容を取り上げる。
- ・ 重要語句(表現)を繰り返し活用する。
- ・ 児童の発言に対して適切な切り返しをすることで理解を深める。
- ・ 目的・場面・状況の設定により、児童にゴールイメージを明確にもたせる。

これらのことを、授業による実践に取り入れることとした。

(2) 研究授業による検証

前述のポイントをもとに、第5学年と第6学年の **Small Talk** の検証授業を行った。

① 第5学年の授業(単元：Unit 5 She can run fast. He can sing well.、『We can! 1』)

ア 指導のポイントによる手立て

(7) 単元指導と関連した Small Talk の工夫

単元の始めに「5年生の先生方の紹介をしよう」という単元のゴールを示し、自分のできることを紹介することや先生にインタビューをすること等の学習計画を提示した。この単元の計画に基づき、Small Talk では「好きなスポーツ」や「先生クイズ」などをテーマに、単元の学習内容を Small Talk に活用する機会として捉えることで、目的意識をもたせて使いたい表現を増やしたり、伝え方の工夫をしたりするなど、自ら学ぼうという主体性が表れると考えた。

(4) やり取りの手立ての工夫

新学習指導要領解説には、「3 指導計画の作成と内容の取扱い」において、「言語活動で扱う題材は、児童の興味・関心に合ったものとし、国語科や音楽科、図画工作科など、他の教科等で児童が学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容を関連づけたりするなどの工夫をすること」と示されている。そこで、児童に興味・関心をもってやり取りをさせるために、音楽や体育などの他教科の体験を話題に取り入れた。実際の指導では、校歌をリコーダーで弾くなど教員ができることを示しながらやり取りを行うことで、児童は話を推測しながら理解し、充実したやり取りができるようになるのではないかと考えた。

イ 指導の実際 (下線部は、「繰り返し」の表現)

実際の授業で行った Small Talk でのやり取りは以下のとおりである。

教員	児童
T : Do you like music?	Ss : Yes.
T : Me, too. I like music. So, what's this?	Ss : Recorder.
T : Yes. It's recorder. I play the recorder. リコーダーで校歌を演奏する。	
T : I can play the recorder. Can you play the recorder?	S1 : Yes.
T : Oh, <u>you can play the recorder.</u>	S1 : <u>I can play the recorder.</u>
T : Good. How about you? Can you play the recorder?	S2 : ... (戸惑うような反応を見せた)
T : Yes, I can? No, I can't? (ジェスチャーを交えながら)	S2 : No, I can't.
T : OK. You can't play the recorder. How about you? Can you play the recorder?	S3 : Yes, I can. I can play the recorder.
T : Me, too. I can play the recorder. But I can't play volleyball. Can you play volleyball?	S4 : No, I can't.
T : Oh, Really? You play volleyball at P.E. ...	

実際に演奏することで、「can=できる」だということを体験的に理解させることができた。

外国語が苦手な S2 の児童も、語句や文を繰り返し言うことで、話を推測しながら質問に答えることができた。

I can't という表現に触れさせるために、教員自身が苦手で今実際に体育科で学習しているバレーボールを話題に出した。

② 第6学年の授業 (単元 : Unit4 I like my town., 『We can! 2』)

ア 指導のポイントによる手立て

(7) 単元と関連した Small Talk の工夫

単元の始めに「ALTに自分たちの住んでいる地域を紹介しよう」という単元目標を示すことで、児童は自分たちの地域のよさや好きなところ、楽しいところを伝えるためにはどの表現が必要かを考え

るようになり、学習の見通しをもつことができる。さらに Small Talk ではこの単元指導に基づき、テーマを学校、地域と広げることで、児童は段階的に必要な表現を繰り返し使用することで定着させることができ、主体的に学習に取り組むのではないかと考えた。

(1) やり取りの手立ての工夫

教員と代表児童のやり取りの際に、例えば”Do you like reading books?”などの、トピックに関連した内容をより詳しく知るための質問を教員が児童にすることで、児童は自分自身の考えや気持ちを伝えたいという意欲が高まり、相手に伝えたいことを表現したり、聞いてみたいことを質問したりして楽しみながらやり取りができるのではないかと考えた。

イ 指導の実際（下線部は、「繰り返し」の表現）

実際の授業で行った Small Talk でのやり取りは以下のとおりである。

教員	児童
<p>T: Nishiike-syo is a nice school. I like Nishiike-syo. We have a big ground. We can run. We can enjoy ケイドロ and 増えおに. I can enjoy playing dodgeball. I like dodgeball. Nishiike-syo is a nice school. Ok?</p> <p>T: Nishiike-syo is a nice school, right? Why?</p> <p>T: We have.....</p> <p>T: Oh, <u>you have a music room.</u> Nishiike-syo is a nice school. Thank you.</p> <p>How about you?</p> <p>T: Oh, <u>you have a library.</u> Do you like reading books?</p> <p>T: <u>You can enjoy reading books.</u></p> <p>T: Thank you. Now, let's talk with your partner. Ok?</p> <p>T: "Nishiike-syo is a nice school." "Why?" "We have" Ready go.</p> <p>T: ペアでやり取りしてみてください「どうやって言うのですか。」というものはありましたか。</p> <p>T: How do you say “本を読む” in English?</p> <p>T: That's right, “reading books”. ペアの相手に何と伝えなかったのですか。</p> <p>T: 「好きです。」 in English, I ...</p> <p>...</p>	<p>Ss: Ok.</p> <p>S1: <u>We have a music room.</u></p> <p>S2: <u>We have a library.</u></p> <p>S2: Yes.</p> <p>S2: Yes. <u>I can enjoy reading books.</u></p> <p>Ss: Ok.</p> <p>S3: Hello.</p> <p>S4: Hello.</p> <p>S3: Nishiikes-syo is a nice school.</p> <p>S4: Why?</p> <p>S3: We have a big swimming pool. I like swimming. How about you?</p> <p>S4: I like Nishiike-syo.</p> <p>S3: Why?</p> <p>S4: We have an announcement room. I like giving announcement.</p> <p>S3: That's nice. Nice talking to you.</p> <p>S4: Nice talking to you too.</p> <p>S5: 「本を読む」</p> <p>Ss: “reading books”</p> <p>S5: 「本を読むことが好きです。」</p> <p>Ss: I like</p> <p>S5: I like reading books.</p> <p>...</p>

児童の身近な内容で、様々な情報を取り入れ、多方面から伝えることができることに気付かせた。

テーマに関連した内容について、教員がより詳しく質問することで、児童が既習表現を使って自分の気持ちを表現できるようにした。

1回目のやり取りで言えなかった言葉を確認し情報をシェアすることで、2回目のやり取りに生かせるようにした。

やり取りの出だしを伝え、ペアで取り組みやすいようにした。また、出だしにとどめることでやり取りの中で伝えたいことを自由に表現できるようにした。

(3) 考察

研究授業では、先述の Small Talk の5つの指導のポイントを踏まえて実践した。このポイントを

意識して指導を行うとスムーズに進められ、活動を充実させることができることが確認できた。それぞれの授業については、5学年の単元指導と関連した Small Talk の工夫をすると児童に主体的なやり取りを促すことまでは十分に検証を行うことができなかった。また、他教科の体験を取り入れ、実際に演奏をするなどの工夫をすると、児童は話を推測しながら理解しようとしており、そのことを踏まえて教員の質問に答えようとしていた。しかしながら、児童の答えは、「Yes, I can.」「No, I can't.」に留まり、単調なやり取りに終わっている。そのため、教員が関連する内容を付け加えるなどしながら質問をしたり、児童から質問させるように促したりするようなやり取りを行う必要があると考えられる。

6年においては、児童のやり取りで「We have ~」という既習表現を使っていることや、教材では扱われていない「announcement room」という言葉を用いていることから、単元学習の見通しをもたせながら Small Talk のテーマを広げることで主体的に取り組もうとすることが一部確認された。また、やり取りの手立ての工夫については、教員と代表児童のやり取りでは児童は教員の質問に基づいて自分自身の考えや気持ちを表現していたものの、児童のやり取りでは発話内容が限定的であったことから、十分ではなかったと言える。そのため、「一言付け加えて伝える」ことや「自分や相手の気持ちをやり取りする」ことなどを助言して指導を行う必要がある。

これらを踏まえると、Small Talk では、「クラスの友達のできること」「他の先生のできること」など、テーマを友達、先生と第三者に広げることや総合での町探検や国語での地域紹介パンフレット作りなどの学習を想起させ、関連付けたテーマによりやり取りをさせながらトピックに沿った自分自身の考えや気持ちを表現できるように指導することが必要であるといえる。

2 中学校グループの実践

(1) 「話すこと」の指導に関する整理

「話すこと」の指導について、市内の教員に対する調査と新学習指導要領解説をもとに整理する。

① 市内の教員に対する調査

本調査は、市内の中学校における外国語科の指導の実態を確認するために、各中学校の外国語科担当教員を対象に、夏季休業中に実施した。回答数は 52 である。結果では、1 単位時間における指導の割合が、話すこと（やり取り）の項目について 54% が「やや多い」と答えている。また、「コミュニケーションの目的・場面・状況を意識している割合」の項目について、「あてはまる」、「ややあてはまる」と肯定的に回答した割合は、98% である。

これに対し、授業でよく行っている学習活動について回答数の多かったものは「音読」、「フラッシュカード」、「ワークブック」、「Q&A」、「TF テスト」である（図2）。一方、「話すこと」の言語活動である「インタビューテスト」の実施は多くはなかった。このことから、各技能の「練習」に該当する活動は充実しているが、言語活動を中心とした指導の割合は少ないと推察される。

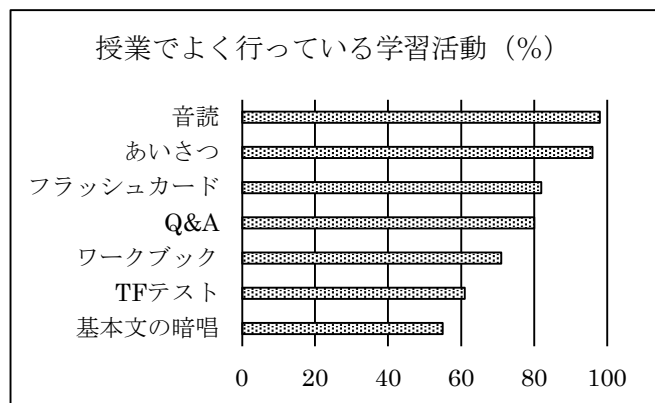


図2：授業で行われている学習活動

② 学習指導要領との関連

『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説』では、中学校の外国語科で「特に他者とのコミュニケーションに焦点を当てて指導することが重要である」（p.11）と述べられている。また、『「コミュニケーションを行う目的や場面、状況など」とは、コミュニケーションを行うことによって達成しようとする目的や、話し手や聞き手を含む発話の場面、コミュニケーションを行う相手との関係性やコミュニケーションを行う際の環境のことを指す。こうした「目的や場面、状況など」は、外国語を

適切に使用するために必要不可欠』(p.14)とその重要性を指摘している。

以上を踏まえると、小・中学校を通じてコミュニケーション能力を身に付けさせるための指導を充実させるために、「中学校外国語科の移行期間における指導資料」で示された帯活動での Small Talk の実践と、目的・場面・状況を設定した言語活動を中心とする授業実践が求められていることがわかる。

(2) 指導方法の検討

前述より、帯活動における Small Talk の実践と、目的・場面・状況を設定した言語活動を中心とした授業実践が必要であるため、「話すこと」の言語活動による指導の充実を目指して、インタラクションの機会を十分に確保し、目的・場面・状況の設定を重視した指導を検討する。

① インタラクションを重視した指導

図2は、インタラクションを重視した指導のイメージである。非明示的な言語習得の流れを重視しているため、言語材料は最初に示さず、本時の活動の目的・場面・状況を示し、言語活動を何度もくり返す。間違いをくり返しながら言語活動を重ねる過程で、徐々に言語を習得していく流れを重視している。教員の指導は言語活動と言語活動の間に行う。生徒の間違いや、適切な表現などを全体で共有する指導に焦点をあてる。日本語での文法事項や文構造などの明示的な説明は、複数回の言語活動の後に行う。

② 目的・場面・状況の設定を重視した指導

「移行期間の指導資料」に示されている Small Talk は小学校高学年で設定されているものとはほぼ同様である。この指導の流れを、授業の展開場面に活用することで、Small Talk も含めた言語活動の充実につながると考えた。「話すこと」の言語活動による目的・場面・状況を生徒に理解させるための指導のイメージは図4、図5である。コミュニケーションの目的・場面・状況を生徒に推測させる場面として、ALT と JTE のやり取りを提示してその内容をもとに行う生徒同士のやり取り、JTE と生徒のやり取りの2つを想定した。前者については、ALT と JTE の会話の内容がどのようなものなのか、より明確に推測しやすいように写真やジェスチャーを用いる。インタラクションの中では ALT や JTE が生徒に質問し、その内容について対生徒同士のやり取りを行う。その際に、ペアを変えながら同じ内容の対話を行う。さらに、ALT と JTE のインタラクションを聞かせ、生徒同士のやり取りを繰り返す。この流れにより、生徒同士のやり取りをとおして目的・場面・状況が推測されることがある。後者では、新しい言語材料について説明をせずに、teacher talk と生徒のやり取りを中心にインタラクション (Interactive Teacher Talk) を行う。十分に生徒と英語でやり取りをして、言語材料を使う目的・場面・状況を理解させる。

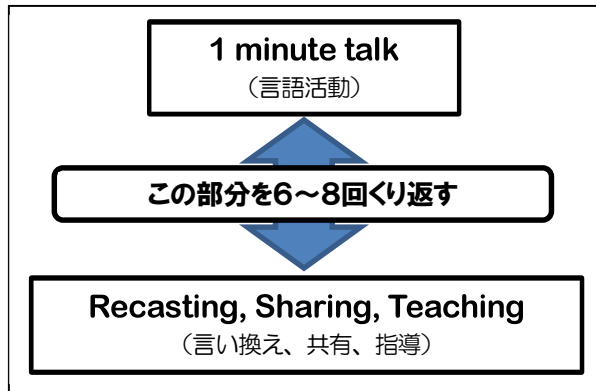


図3：インタラクションを重視したイメージ

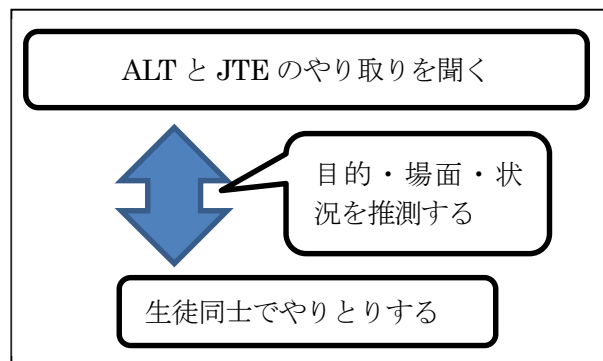


図4：目的・場面・状況を推測させる指導のイメージ①

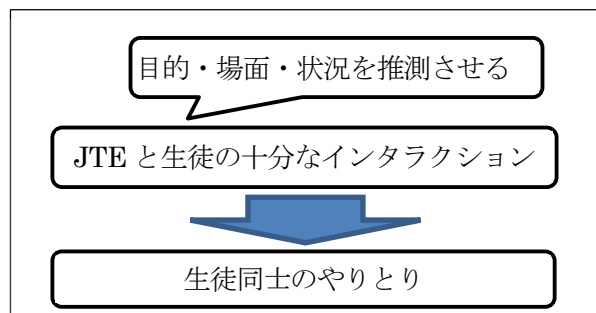


図5：目的・場面・状況を推測させる指導のイメージ②

教員の真似をして生徒同士のやりとりをしたあとに、英作文などに取り組み、文法事項の定着を確認する。

(3) 研究授業による検証

① インタラク션을重視した指導

生徒同士のインタラク션을重視した研究授業を、C 中学校第 2 学年の単元「Program7 If You Wish to See a Change」で実施した。単元内で指導する言語材料である「主語＋動詞(give)＋間接目的語＋動詞」の文構造での指導で検証した。

ア 指導のポイントとの関連

本授業では、学習課題を「修学旅行のおみやげについて話す」と設定した。修学旅行前ということで、言語活動の目的・場面・状況を、目的「おみやげについて話す：P」、場面「友だちや先生とおしゃべり：S」、状況「相手が日本語を話せない：S」と分けて設定し、Today's PSS と提示した。外国語科の学習状況を踏まえて意図的に配置したペアを基本に、インタラク션을通じて効果的な学習ができるよう配慮した。ペアで言語活動を繰り返すことにより、発話の機会を増やした。

イ 授業の様子

授業の展開の場面では、1 分間の生徒同士のインタラク션による言語活動をペアを変えながら 6～8 回繰り返す。言語活動が 1 分終わるごとに、教員が生徒の会話による表現を用いて言い換え、修正、称賛、共有などを英語で行う。このような言語活動の中で、生徒は自分の言いたいことを間違いながらも言おうとしていた。また、繰り返すごとに会話の内容が改善され、やり取りの質を向上させていた。生徒は相手が言ったことのメモは取るが、事前に英文を書いたりせず、即興で話をしている。年度当初から音読の際などにジェスチャーをつけるよう指導しているため、自然とジェスチャーを使って伝えようとする様子が見られた（写真 1）。



写真 1：授業の様子

① 目的・場面・状況の設定を重視した指導

目的・場面・状況の設定を重視した研究授業を、同様に第 2 学年 単元「Program7 If You Wish to See a Change」で実施した。指導する言語材料は前述と同じである。また、学習課題も「修学旅行のお土産について話そう」と同様に設定した。

ア ALT と JTE のやり取りをもとにした生徒同士のやり取りの場面での推測を重視した指導

(7) 指導のポイントとの関連

D 中学校での授業では、授業の最初から新出文法を提示するのではなく、生徒の興味・関心を引く内容の Teacher talk から始め、言語活動をする際にペアを変えてくり返し英語で伝えあったり、指導にリキャストを取り入れたりすることで、コミュニケーションの目的・場面・状況を推測させながら言語材料の意味とその使い方を捉え、自然に新出文法を習得できるようにした。

(i) 生徒の様子

生徒は ALT と JTE のやり取りを聞きながら、「どんな場面の話をしているのか？初めて聞く文（文法）はどれか？それはどんな意味なのか？」と場面や状況を把握していた。また、やり取りの中に新出の文構造が出てきても、その推測により目的・場面・状況を関連させながら理解することができていたため、説明を求める生徒はいなかった。これは、写真の提示により推測が促進されたためであると考えられる。

イ JTE と生徒のやり取りの場面での推測を重視した指導

(7) 指導のポイントとの関連

E 中学校での授業では、教員が既習事項を使って生徒とやり取りをしながら新しい言語材料を導入した。その時に生徒に目的・場面・状況に沿った写真などを用いて推測させながら、どのように使われるのかを理解させた。生徒に口頭で英文を発表させたあと、他の生徒にインタビューをさせてその意見を記録させた。生徒同士の言語活動のあと、新しい言語材料の説明を行った。

(4) 生徒の様子

生徒が楽しみにしている修学旅行を話題として既習事項を用いてやり取りしたので、目的・場面・状況の理解は難しくなかったようである。文構造のまとめをする前に生徒同士のやり取りをしたが、JTEの真似をしながら口頭で作文をすることができた。また、疑問文を使って、他の生徒にインタビューすることができた。最後に作文をさせて学習内容の確認をすると、多少の綴りの誤りは見られたが、文構造を正しく書いていた。

(4) データによる検証

指導の効果測定のために、研究授業の前後にパフォーマンステストを実施した。内容は ALT による 1 人あたり 2 分のインタビューテストであり、学校行事を考慮して 1 回目は職場体験、2 回目は修学旅行に関するものとした。このテストでは、質問から回答までにかかった時間、コミュニケーションを円滑にする表現を活用した発話、回答の内容（文法が正しく伝わる回答、単語、語句による回答、発話した内容が合わない回答、無言回答）について調査した。

まず、質問後、生徒が応答するまでの時間の平均は表 1 である。授業でインタラクションを重視したり、目的・場面・状況を重視して話すことの言語活動を行ったりすると、相手の質問に早く答えることができることわかる。つまり、生徒の英語によるやり取りの能力が向上しているといえる。また、コミュニケーションを円滑にする表現の使用率については、C 校でのみの検証であったが 1 回目の 13%が、2 回目には 53%に向上している。生徒はコミュニケーションを円滑にする表現を用いることで、質問の回答を考える時間時間稼ぎをしており、このことが応答するまでの時間の短縮に影響していると考えられる。さらに、E 校では質問への無回答（沈黙）の割合が 25%から 7%に減少した。授業での言語活動によるインタラクションの成果が確認された。

表 2：質問後、応答するまでの時間の平均

	1 回目	2 回目
C 中学校	4.3 秒	1.8 秒
D 中学校	14.0 秒	9.5 秒
E 中学校	3.2 秒	2.1 秒

(5) 考察

インタラクションを重視した授業では、生徒同士のやり取りを繰り返させることによって、やり取りの中で表現が少しずつ改善されていた。また、自分自身の話題であるため、活動に意欲的に取り組むことができ、事前に準備をすることのない即興的なやり取りをしていた。さらに、Really?や That's nice.などのコミュニケーションを円滑にする表現を会話中に活用するように指導したことで、生徒が英語でやり取りを続ける様子が見られるようになった。一方で、教員の過度な説明や解説により指導する言語材料を使わなくなった生徒がいたことや、机間指導の中で生徒の誤りを十分に修正できなかったことが課題である。インタラクションを重視するだけでなく、やり取りを続けることに必要な表現の指導や教員の個別の支援が必要であるといえる。目的・場面・状況の設定を重視した指導については、そのことを意識して ALT とのやり取りを提示したり、生徒とのやり取りを行ったりすることで生徒に推測させることができ、新出の言語材料であっても非明示的に指導が進められる。いわゆる「練習」となる指導だけではなく、生徒に英語をやり取りの場面で使わせながら学ばせることが可能であることがわかる。その際、生徒の誤りを正しい表現に言い換えるなどして、正確性を高める必要がある。一方で、やり取りと発表は領域で分けられていることを十分に理解し、それぞれの目的を認識しながら指導を進めることが課題であった。

以上より、やり取りを重視した授業展開により目的・場面・状況を重視した指導を行えば、即興による言語活動の充実を図ることができるといえる。

VI まとめ

小学校の成果として、Small Talk の内容に実際に体験したことをテーマに取り入れることで、内容を推測しながら聞くことができ、その後の学習に主体的に取り組む児童の姿が確認された。Small Talk の指導にあたっては、単元指導に基づいてテーマを広げることが必要であると言える。

一方、発話内容が限定的であり、自分自身の考えや気持ちを十分に表現することができていないことが課題である。そのため、児童が Small Talk で、それらを主体的に表現できるように、教員は前述の成果を取り入れながら、「一言感想を言うことができたか」、「相手の言ったことを繰り返して言えたか」などをやり取り後に確認し、対話を続けるための基本的な表現の使用に意識を向けさせる指導が必要である。

中学校の実践では、帯活動に Small Talk を入れることで、言語活動の導入における指導スタイルは、小学校と共通であることが分かった。また、実際に使用される会話の流れの中にターゲットとなる言語材料を含めて指導するため、ドリル的な言語活動にならず、より自然な言語習得の流れに近づけることができる。

課題は、言語活動を中心として即興性や生徒の発話量、内容などを重視したため、生徒が話す英語の正確性を担保する必要があることである。また、「話すこと」の中の、[やり取り]と[発表]の違いを十分に踏まえた上で指導することができなかつた。加えて、コミュニケーションを円滑にする表現（いわゆる、ディスコースマーカ―（談話標識））の指導を十分にできなかつたことが挙げられる。

小中共に、言語活動を充実させていくためには、教科書などで示された例文ではなく、指導者や児童生徒が自分自身に関する本当の出来事や気持ち等について、やり取りすることが大切である。対話を発展・継続させるためには、相手の発話に対してつなぎ言葉や談話標識などを用いて相手の発話に応じるよう指導することが有効である。一回の授業や言語活動でやり取りの技能や即興性が身につくものではない。身近な話題から自分のことを伝え合う活動を継続的に行う必要がある。

今後の方向性としては、本研究での知見に加えて、つなぎ言葉や談話標識を整理し、体系化したものを提示するとよいと考えられる。このことで、小中学校で一貫したコミュニケーション能力を身に付けるための指導が図られる。そのため、小中相互の授業参観を行い、本年度小中それぞれのグループで実践した指導スタイルを継続しながら、小中連携をより強めていくための研究を続けていくことが重要である。

註

- 1 新学習指導要領によると、「即興で」話すことによる言語活動とは、「話すこと [やり取り]」では、「(ア) 関心のある事柄について、相手からの質問に対し、その場で適切に応答したり、関連する質問をしたりして、互いに会話を継続する活動」、「話すこと [発表]」については、「(ア) 関心のある事柄について、その場で考えを整理して口頭で説明する活動」と例示されている。

引用・参考文献

文部科学省（平成 29 年）『小学校学習指導要領』

文部科学省（平成 29 年）『中学校学習指導要領』

文部科学省（平成 30 年）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編』

文部科学省（平成 30 年）『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語編』

研究同人

所 長 和田 有美

指導主事 片山 弘喜

研 究 員 甲 斐 桃 音（宮崎市立西池小学校） 山 崎 努（宮崎市立大塚小学校）

月 野 香 織（宮崎市立本郷小学校） 柳 衛 いく子（宮崎市立宮崎東中学校）

阿 萬 幸 子（宮崎市立本郷中学校） 益 留 大（宮崎市立東大宮中学校）